



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	大学史資料室展示報告「學藝アルバム：高度經濟成長期の東京学芸大学と地域社会」( fulltext )
Author(s)	椿,真智子
Citation	東京学芸大学大学史資料室報, 3: 58-59
Issue Date	2016-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/159338">http://hdl.handle.net/2309/159338</a>
Publisher	東京学芸大学大学史資料室
Rights	

# 大学史資料室展示報告「學藝アルバム－高度経済成長期の東京学芸大学と地域社会－」

東京学芸大学大学史資料室 椿 真智子

2015年7月24日～8月20日の4週間、第3回大学史資料室展示を本学附属図書館1階「ラーニングコモンズ」にて行った。「ラーニングコモンズ」は附属図書館改修に伴い、2015年5月に学生のグループ学習やワークショップ等の自主的な学びの場として新たに開設されたスペースである。今回のテーマは「學藝アルバム－高度経済成長期の東京学芸大学と地域社会－」とし、第1・2回大学史資料室展示の「師範学校の学び」ならびに「学芸大キャンパスの移り変わり」に関する内容を一部活用しつつ、第二次世界大戦後の高度経済成長期に焦点をあてた。

1949（昭和24）年に東京第一・第二・第三師範学校および青年師範学校を母体として発足した東京学芸大学は、すでに半世紀以上の歴史を刻んできた。なかでも今回とりあげた1960年代は、「国民所得倍增計画」に象徴される高度経済成長のもとで社会全体が大きく変貌を遂げた時期である。本学周辺地域においても都市化が進展し、人口が急増した。近郊農村からベッドタウンへの転換期がまさに1960年代であった。新制大学発足当初並置されていた3つの師範学校と青年師範学校は1951（昭和26）年に幕を閉じ、1964（昭和39）年には現・小金井キャンパスに大学機能が統合され、新たな組織・体制がスタートした。また1960年代には戦前の建物が徐々に新たな建造環境へ生まれ変わり、キャンパス全体の整備も進んだ。高度経済成長期は本学の骨格が形作られた時期でもあった。

展示構成は以下のとおりであり、本学や本学関係者が所蔵する資料を展示するとともに、小金井市教育委員会より数点の写真資料と地図掲載をご許可いただいた。ご協力くださった関係各位にあらためて厚く御礼申しあげたい。

- I はじめに
- II 学芸大キャンパスの移り変わり
  - (1) 第二次世界大戦前・後の学芸大周辺地域
  - (2) 1960年代と現在の学芸大キャンパス
- III 高度経済成長期における学芸大周辺地域の移り変わり
- IV データでみる学芸大の移り変わり
- V 写真でみる高度経済成長期の大学生生活
  - (1) 大学の学び
  - (2) 大学の行事・キャンパス生活



展示資料

## 1. 学芸大キャンパスの移り変わり

昭和戦前期には多摩地域に多くの軍関係施設や研究所、軍需工場が開設された。現・小金井キャンパスの敷地も1941（昭和16）年に開設された陸軍技術研究所跡の一部である。展示Ⅱ－（1）では、陸軍陸地測量部作成の旧版地形図や「小金井町全図」、空中写真、地形断面模式図、写真などにもとづき、陸軍技術研究所開設前後の景観や土地利用などを示した。

乏水性の武蔵野台地（武蔵野面）上に位置する大学周辺には戦前、落葉広葉樹林や普通畑、桑畑が広がり、道路や玉川上水に沿って江戸時代に開発された新田集落が立地していた。現・キャンパスには享保期に入植した農家の敷地があり、空中写真からは畑地や今も残る屋敷林が確認できる。小金井村が町制を施行した1937（昭和12）年「東京府小金井町全図」によれば、武蔵小金井駅（1926年開設）の周囲は都市化し始めたものの、現・キャンパス周辺地域はまだ農村的性格を有していた。

展示Ⅱ－（2）では国土地理院地形図、キャンパス配置図、写真などにより、1949年に新制大学としてスタートした学芸大キャンパスの1960年代の様子や変化を示した。1950年代半ば以降、キャンパス内の施設整備や造園が着手され、道路舗装等も進んだが、1960年代前半にはまだ陸軍技術研究所時代の木造の建物が多く使用されていた。

## 2. 高度経済成長期における学芸大周辺地域の移り変わり

展示Ⅲでは、小金井市の人口動態や写真をとおして、高度経済成長期における大学周辺地域の変化と特徴を概観した。1958（昭和33）年に市制が施行されたのち、小金井市の人口増加率は1960～65年に67.1%となり、東京都全体の

13.3%を大きく上回った。急速な住宅地化や公務員宿舎・団地の建設は、農地や林地の大幅な減少をもたらし、貸家・アパートや駐車場経営を行う兼業農家が増えた。武蔵小金井および東小金井駅周辺の写真からは、鉄道駅を中心に都市化する様子をうかがうことができる一方、同時期の農家やハケ沿いの水田、植木苗木・うど栽培の写真や土地利用図からは都市農業の隆盛も読み取ることができる。

### 3. データでみる学芸大の移り変わり

展示Ⅳでは、学芸大の学部教育を中心とした1970年代までの歩み（年表）、1950年代から現在までの学部募集人員や学部志願者数・学部入学者数・大学院修了者数等の推移、1966（昭和41）年のカリキュラム履修基準（第二次改定）、国立大学における授業料の推移等を図表で示した。

1964（昭和39）年に世田谷・小金井分校廃止をもって小金井への大学機能の統合が完了し、新たな組織・体制がスタートした。同時期に学部再編や学生定員増も進み、1966（昭和41）年には大学院修士課程が設置された。同年、「学芸学部」から「教育学部」へと改称され、1960年代は名実ともに本学の教員養成系大学としての基盤が確立した時期であった。

### 4. 写真でみる高度経済成長期の大学生生活

展示Ⅴ－（1）では「大学の学び」として、1960年代前後の授業や教育実習の様子、陸軍技術研究所時代に建設されたプールでの水泳競技の風景の写真を展示した。続くⅤ－（2）では「大学の行事・キャンパス生活」として、現在は行われていない「開学祭」「武蔵野マラソン」「スキー合宿」等の行事や、1960年代に整備された特徴的な施設・場所の写真、1969（昭和44）年度『学生便覧』にもとづく「学生課外活動団体一覧」を示した。

また展示ケースには、1960年代の「学生証」や日本育英会「奨学金手帳」、「小金井祭パンフレット（1966年・1969年）」、『学生生活の手引き』（1964年）にみる下宿・間借り代など、当時の学生生活の一端を表す資料を展示した。学生生活の象徴ともいえる大学祭は、1951（昭和26）年に世田谷分校で開催された「第一回統一大学祭」に始まり、紆余曲折を経て、1964年の小金井地区統合後、毎年11月に「小金井祭」として開催され今にいたる。1960年代後半の「小金井祭パンフレット」からは、政治・社会問題を反映した多くの企画や市内パレード、学長講演、文化講演会、映画上映、体育祭等が実施されるなど、時代状況を反映した大学祭の姿を知ることができる。

第二次世界大戦後から現在にいたる大学史の本格的な資料収集・保存はスタートラインにたったばかりである。とりわけ戦後、急速に変化をとげた高度経済成長期の大学生生活の実態を把握できる資料や、公文書からはうかがい知れない日常の生活史・風景は早くもわれわれの記憶から消えさろうとしている。2020年には二度目の東京オリンピックが開催されることになった今、変革のうねりの中で本学および周辺地域が歩んできた履歴をふりかえりつつ、本展示が新たな将来像を考える契機となれば幸いである。



展示資料